

放課後児童クラブにおける特別な配慮を要する児童の支援に関する研究Ⅲ

～訪問支援及びオンライン研修会の効果検討～

吉川 昌子 重橋 史朗 松藤 光生

A Study on a support for children with Special Needs in After-school children's clubs (Ⅲ) - Examination of the effects of visit support and online workshop -

Shoko Yoshikawa Fumio Jubashi Mitsuo Matsufuji

1. 問題と目的

本研究は、令和2年度糸島市協定大学等課題解決型研究事業「放課後児童クラブにおける児童の発達支援に関する研究」の一環で、著者らが実施した研究（Ⅰ）「一要支援児童に対応する支援員の困難感に関する検討」、研究（Ⅱ）「一要支援児童の実態と求められる支援」に続く研究（Ⅲ）にあたり、訪問支援及びオンライン研修会の効果を検討するものである。

放課後児童クラブ運営指針（平成27年4月厚生労働省策定）に示される「放課後児童クラブにおける育成支援の内容」において、放課後児童クラブ（以下、「児童クラブ」と表記する）は「年齢や発達の状況が異なる多様な子ども達が一緒に過ごす場」であり、その「支援員等には、それぞれの子どもの発達の特徴や子ども同士の関係を捉えながら適切に関わることで、子どもが安心して過ごせるようにし、一人ひとりと集団全体の生活を豊かにすること」が求められている。とりわけ「障害のある子ども」の受け入れについては、「地域社会で生活する平等の権利の享受と、包容・参加（インクルージョン）の考え方に立ち、「適切な配慮及び環境整備」の必要性が明記されている。また虐待等の疑いで「特に配慮を必要とする子どもへの対応」については、家庭環境や子どもの状況を見極め、児童虐待の早期発見と関係機関との連携により、「適切な支援につなげるように努める」必要がある。

さらに、2012年文部科学省の「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」にみられるように、医学的診断の有無に関わらず、児童クラブにも特別な配慮を要する児童が少なからず在籍していると推定される。こ

のように多様なニーズを抱える子どもたちが在籍する児童クラブで、その支援の中心を担う放課後児童支援員（以下、「支援員」と表記）は、放課後の子どもたちが「安心して過ごせる生活の場となるように」、「その役割及び機能を適切に発揮」する直接の担い手となっている。しかしその一方で、「児童クラブで働く職員の確保が困難（出雲市, 2016）」なことも多く、その背景には、支援員の職務内容の「負担」や「困難さ」が少なからず影響しているものと推察される。実際にクラブの支援員を対象とした相談事業を実施している機関の報告では、その相談内容の1位に「子どもへの対応」があげられている（NPO法人 親子ふれあい教育研究所, 2016）。こうした児童クラブにおける指導員の困難性に関しては、上村・坂本・伊勢（2013）により、「乱暴で暴力的」、「友達との適切な関係を築けない」といった「子どもの育ち」の未熟さや、「保護者の関わり」に関する困難さを含め、多岐にわたる項目が示されており、その解決に向けた指導員のスキルアップや専門機関との連携について、具体的な取り組みを検討する必要性が述べられている。

同様の知見で針塚（2018）は、学童保育支援員および学童保育巡回相談員への質問紙・面接調査から、「対応に困難さを感じる子どもの特徴として、「他者への加害行動」で「特に気にいらないと暴れたり、外へ出たがる子ども」、「他児に乱暴な言葉遣いや暴力をふるう子ども」、「友達を怖がらせ支配しようとする子ども」などを示している。さらに「自己中心・自己制御困難」については、「支援員に暴言を吐く子ども」、「雰囲気を読み取れない子ども」、「学習困難・遊びの自己中心性」、「不注意」の4つの因子を抽出している。

重橋 (2018) は、こうした「気になる児童」の特徴は、障害特性(自閉症スペクトラム障害や注意欠如多動性障害)の二次障害として現れたものであり、それらの言動に振り回されている支援者に対する、「障害理解のための継続的な研修、定期的な専門家による訪問(指導・助言)や事例検討による具体的な対応についてのサポート、他学童保育所とのグループワークを通じた情報交換と課題解決への主体的な取り組みの必要性」を指摘している。

このように支援員相互の情報交換は、日々子どもへの対応に困難感を抱える支援者にとって、解決の糸口を得る取り組みとして期待されるが、支援員相互連携の困難性について検討した針塚(2018)は、「支援員同士の子供に対する取り組みの共通意識」、「日常の保育の改善に対する意見提案」という項目への評価が低く、支援員相互の連携が不足していることを示している。この点については、「要支援児童への対応困難感」を検討した松藤ら(2021)の研究(I)においても、支援員間で「共通理解を持つことが出来ていない」ことが示唆されている。

こうした困難な状況にあっても、「学童保育においては相談員など専門家の配置が少なく、支援員への助言や支援が十分でない」ことから、問題を抱えながらも特別な支援の必要が認められないまま、支援員が個々に戸惑いつつ、その対応に日々追われているのが現状であろう。

そこで本研究では、放課後児童クラブに直接出向いて実施した訪問支援、及び糸島市の全児童クラブの支援員を対象とした研修会が、日々子どもへの対応にどのように役立てられるかについて、その効果を検討する。

また当初の研究計画では、会場での対面開催を予定していた研修会を、近年世界的に流行している新型コロナウイルス感染症「COVID-19」の感染防止対策の一貫として、オンライン形式に変更した。そこでオンライン形式での開催により、研修会参加者にとってはどのような学びとなり得たか、その評価についても合わせて検討する。

2. 方法

①調査協力者:糸島市15小学校区に所在する児童クラブの支援員。なお糸島市には、市が所管する児童クラブが28施設あり、令和2年4月現在、その入所児童数は1,418人で、ここ3年間の伸び率は4.9%と、年々増加傾向にある。また発達障害児童等の受け入れによる支援員の加配対象児童数が、45.5%の伸びとなっている(大鶴, 2021)。

②調査項目

【訪問支援】研究(I)における1回目のアンケート調査で支援員の困り感尺度の得点が高く、かつ困難な事例が多く報告されていることを基準にして選定した6

箇所の児童クラブに対して、X年7月から8月にかけて著者ら3名(臨床心理士有資格者)が訪問支援を実施した。訪問時には、アンケート調査に記載のあった対応困難な児童の実際の様子を観察するとともに、その対象児の普段の様子や支援員の子どもへのとらえ方や関わり方について、インタビュー調査を行った。またそれらの行動観察と聴き取りの内容を踏まえて、問題とみられる子どもの行動の背景にあると推察される要因や対応方法について、著者らが支援員に助言するコンサルテーションの時間を設けた。

【研修会】糸島市の放課後児童クラブ28施設に在職する支援員全体を対象に、X年2月24日に実施した。この研修会は当初の計画では、同じ年度内に2回、対面による開催を予定していた。しかしながら、COVID-19感染予防のための自粛期間と重なったため、対面実施の予定から、オンライン形式への変更を余儀なくされた。さらに各クラブにインターネット回線が整うのを待つことに数カ月を要したため、年度の前半は、開催することができず、やむを得ず後半に1回のみ開催となった。

研修会当日は、ビデオ会議システム(Zoom)により、講師と主催者(著者ら)が、糸島市役所の会議室からLIVE配信し、支援員は各児童クラブに設置のテレビモニターで視聴した。研修会の講師は、糸島市内の小学校で定期的に教育相談を担当し、発達が気になる児童とその保護者の相談支援にあっている臨床心理士1名であった。著者らは司会進行及び研修会のオンライン会議に必要なシステムの管理を担当した。

研修会のプログラムは2時間の枠で、前半は講師による講義(発達障害の特性、男女差・学年別の心の発達、発達障害のある子どもに関わる際の配慮点、保護者などどのように向き合うかなど)、後半には各クラブ支援員からの質疑応答の時間を設けた。なおZoomは参加者の大半が、今回初めての利用であったため、研修会の開催当日にさきかけ、2回(2日間)にわたってZoom動作確認の時間枠を設けて、各クラブからのアクセスに対応した。さらに当日は研修会の始めに、Zoomの画面上の操作方法について説明するための時間を設けた。オンライン研修の開催中は、講師と参加者が相互にその応答を視覚的に確認できるように、両サイドでビデオをオンに設定して、研修会に臨んだ。

【事後ヒアリング】

X年7月から8月に訪問した児童クラブを対象に、その後の児童の状態を確認するための聞き取り調査をオンラインのビデオ会議形式で実施した。実施場所として、支援員は各児童クラブにおいて、筆者らは本務の職場からそれぞれ参加した。

また支援員からの新たな相談事項に応じるため、コンサルテーションの時間を設けたが、初回の直接的な

訪問支援よりも、多数の支援員の参加がみられた。ヒアリングに要した時間は、各クラブともそれぞれ1時間程度であった。

③アンケート調査

方法：研究(I)に用いた1回目のアンケートに引き続き、2回目となるアンケート調査を実施した。糸島市の全児童クラブ28施設に、レターパックで質問紙を郵送した。その際、各支援員が個別に回答した用紙をそれぞれ密封するための封筒(支援員の人数分)と、それらを取りまとめて返送するためのレターパックを同封した。本研究では、その2回目の回答を分析の対象とする。

時期：X年2月25日～3月8日

分析対象の質問項目：表1・表2に示す通りである。

表1 訪問支援及び事後ヒアリングに関する質問

①昨年に実施した訪問支援、オンライン研修会、オンラインでの事後ヒアリングの中で参加されたもの全てに○をつけてください。 1. 訪問支援 2. オンライン研修会 3. オンラインでの事後ヒアリング
②昨年に行った訪問支援は、子ども達に役立つ内容でしたか？ 1. かなり役立つ 2. 役立つ 3. 少し役に立つ 4. 役に立たない
③オンラインでの事後ヒアリングは、役立つ内容でしたか？ 1. かなり役立つ 2. 役立つ 3. 少し役に立つ 4. 役に立たない
④今回の個別の訪問支援、事後ヒアリングについて、役に立ったと思われる点を以下に記述してください
⑤本研究での取り組みとしまして臨床心理士による直接訪問とオンラインでの研修会、事後ヒアリングという形式での支援を実施させていただきました。その点についての感想を以下に述べてください。
⑥今年度の訪問支援、オンライン研修会と今まで受けてきた支援、研修会との比較で異なる点、メリット・デメリットがありましたら、以下に記述してください。

表2 研修会に関する質問

①研修会は、現在児童クラブに在籍している児童の支援について、どの程度役に立つ内容でしたか？ 1. かなり役に立つ 2. 役立つ 3. 少し役に立つ 4. 役に立たない
②研修会の内容は、どの程度満足できるものでしたか？ 1. かなり満足している 2. 満足している 3. 少し満足している 4. 不満がある
③上記の質問に関して、そのように回答した理由を簡潔にお答えください。
④今回の研修会は、オンラインでの実施となりましたが、対面での研修会との違いについて以下から選択してください。 1. オンラインでの研修会の方がよかった 2. オンラインでも対面でも大きな違いはない 3. 対面での研修会の方がよかった 4. オンライン、対面でそれぞれの良さがあった
⑤オンラインでの実施についての感想を以下に簡単に記述してください
⑥もし今後、同じような研究会がある場合に取扱いしてほしい内容について(複数回答可) 1. 発達障がいへの理解 2. 問題行動への対応、 3. 不登校児童への対応 4. 学業不振への対応 5. 児童虐待(疑い)への対応 6. 学校との連携 7. 地域との連携 8. 保護者支援 9. その他

3. 結果と考察

【訪問支援】

アンケートの質問項目③で得られた回答は、17件で全員が図1に示す通り、役に立つと評価している。

その理由としては、表3に示されるように、「子どもへの対応・関わり方のアドバイス」、「安心・前向きな気持ちへの変化」、「知識・子ども理解」、「直接観察による状況・状態の把握、傾聴」、「アドバイスによる子どもの変化」に大別される記述がみられた。

その中で、「子どもへの対応・関わり方のアドバイス」の記述には、「書籍やネット検索」と異なり、既存の知識を眼の前の子どもに安易にあてはめてみるのではなく、子どもの実際の様子を見て、その状態に応じた具体的なアドバイスが得られたことへの評価が示されている。

その上で「アドバイスによる子どもの変化」の項目に

あるように、訪問支援のコンサルテーションを活かして関わり方を工夫したことにより、子どもの状態が実際に改善に至ったという手応えとして捉えられている。

また「安心・前向きな気持ちへの変化」に含まれる記述には、「対応に迷いがあったが自信がもてるようになった」、「もやもやがすっきり」、「気持ちにゆとり」といった文言が見られ、それまでは対応が難しいと感じていた子どもに対して、戸惑いながらも何とか関わってきたやり方が間違っただけではなかったという安心感が得られたものと推察される。こうした気持ちの変化は、日頃、子どもへの対応に困難感を抱いている支援員の負担・ストレスの軽減に通じるものと考えられる。

さらに「直接観察による状況・状態の把握・傾聴」の項目にあるように、「共感して聞いてもらえた→実践の力となった」という記述は、訪問した臨床心理士らが支援員の言葉にじっくり耳を傾け、その困り感に応じてアドバイスをを行うように心がけたことで、どのように困っているのかをしっかりと受け止められたという実感が支援員に得られたことを示すものと思われる。このような傾聴は、児童クラブ支援員が特別な配慮を要する児童、一人一人に応じて、きめ細やかな援助を行うためのゆとりや意欲を高める上で、重要な心理支援と考えられる。

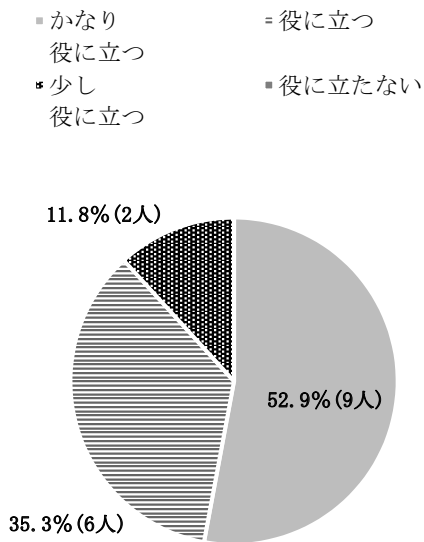


図1 訪問支援役立ち度 (回答者17人)

表3 訪問支援が役立った理由 (のべ23件)

子どもへの対応・関わり方のアドバイス	ほめる 肯定的関わり
	役割を与える・環境の整え方・ことばかけ
	直接、質問することができ、すぐにヒントをもらえる
	一般的な知識とは違い、在籍児童の対応の仕方を具体的に聞くことができた (3件)
安心・前向きな気持ちへの変化	書籍やネット検索とは異なる細やかなアドバイス
	子どもへの対応に迷いがあったが、自信をもてるようになった
	聞きたいことが聞けて、もやもやがすっきり
	気持ちにゆとり
	仲間と共有・確認できているので安心感
	どのクラブも大変な中、がんばって努力している状況
知識・子ども理解	問題行動のみられる子どもに対応しやすくなった
	家庭環境などの影響・背景
	子どもの見方の変化 (それぞれの子どもの異なる部分をよくみるようになった)
	問題行動を起こす子どもの心理の理解
	子どもの心に寄り添う
直接観察による状況・状態の把握・傾聴	クラブに来る時間が子どもにとって一日の疲れが出る時間
	子どもの状態をしっかりときいてもらえた
	共感して聞いてもらえた→実践の力となった
アドバイスによる子どもの変化	実際に子どもの様子をみてもらえたので、言葉で伝えるより、子どもの状態を理解してもらえた
	パニックが減った 児童が落ち着いた

【オンライン研修会】

オンライン研修会後に実施したアンケートにより、回答者全員から「満足」という評価が得られた (図2)。アンケートの回答から「研修会が満足だった理由」に関する記述 (107件) について、テキスト型データ解析ソフト「Word Miner」による分析を行った。出現頻度の多いキーワードと出現パターンの似通った (共起の

- かなり満足している
- 満足している
- 少し満足している
- 不満がある

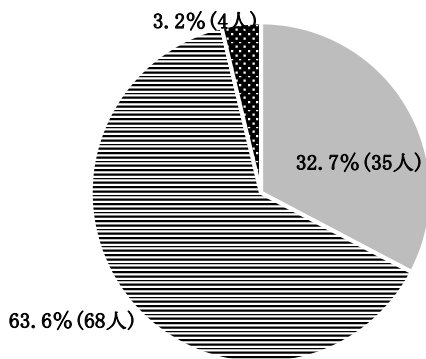


図2 研修会満足度 (回答者数107)

程度が強い語)によるクラスター分析を行ったところ、16の項目に分類された。そのクラスター名(太字)と出現頻度を表4に示している。またそれらは、「興味・関心の高い知識・情報」、「理解しやすさ」、「内省と共通理解の機会」、「課題」の4つのカテゴリーに大別された。

表4 研修会が満足だった理由の記述(107件)に見られた語彙の出現頻度

興味・関心の高い知識・情報の習得	対応・関わり方・支援	42
	個々の特性・学年ごとの特徴・男女差	26
	身近な現場の問題	16
	対応に困っている子どもの理解	13
	他のクラブ・他機関との連携	13
	発達障害	8
	専門的	2
	保護者	2
	応用可能	2
理解しやすさ	わかりやすい	29
	具体的	16
内省・共有の機会	振り返り・再確認	16
	支援員間の共通理解	5
課題	オンライン・資料	7
	現実とのギャップ・不安	3
その他		5

最も多いキーワードは「知識・情報」に関するもので、そのうち「対応・関わり方・支援」が42件、次に「個々の特性・学年ごとの特徴・男女差」26件、さらに「身近な現場の問題」16件、「対応に困っている子どもの理解」13件と続いている。「理解しやすさ」については「わかりやすい」というキーワードが29件、「具体的」が16件である。「内省・共有の機会」に含まれるのは、「振り返り・再確認」が16件、支援員間の共通理解が5件である。このことは、研修会の内容が、支援員間での「共通理解」の不足を補う一助になっていたことを示唆する結果と考えられる。具体的には、「学年別の対応の仕方等がわかりやすく説明されていた」、「日頃から心配している児童にあった内容であり、対応等を再認識できた」、「糸島市内の小学校や児童クラブの話もあり、身近な出来事など共感できる事も多かった」等の意見が寄せられている。その一方で、数は少ないものの、研修会で学んでも、なお「不安」が残ることや、「現実にはあてはまらないこともある」といった今後さらなる支援や検討が必要な課題となる提言もみられた。

【オンライン形式に関する感想】

「オンライン形式による研修会の感想」については、上述の分析と同様の方法により、11の項目に分類された。そのクラスター名(太字)と出現頻度を表5に示している。そのうち、類似する項目については、「気分」、「利便性」、「参加者間交流」の3つのグループにまとめている。

これらのキーワードの中には、オンラインのメリット・デメリットの両方が相対するような項目が多くみられる。具体的には、「緊張ーリラックス」、「聞き取りやすいー聞きづらい」、質疑に「参加しやすいー参加しづらい」などである。また「参加者間の交流」が「間接的でも他のクラブの話題を共有できた」と肯定的に評価される反面、「テレビのよう」、「一方通行」など、「直に交流することができない」もどかしさや物足りなさを感じる参加者もいたと思われる。さらに「勤務地で移動がないことによる利便性」に対して、「遠隔地からの受講によるシステム使用の不具合」など、相反する捉え方が見られる。こうした相違については、個人の捉え方の相違もあるが、COVID-19による「緊急事態宣言」で、急遽取り入れたオンラインシステムを利用したことにより、参加者がこうしたシステムに慣れるための時間的余裕がなかったことが大きく影響していると考えられる。その中でほとんどの支援員にとって、「初めての」オンライン研修会の参加には、多少の緊張感があると思われるが、それをストレスとして負担に感じるか、利便性の方がより強く認識されるかには、個人差もみられた。

一方、聞きづらさについては、クラブによって、ネッ

ト環境やシステムの作動に差異があり、そのために聞きやすいか、聞きづらいか、両極端に分かれる評価になったと言えよう。いずれにしても、今後こういったオンライン形式での実施は、将来的にも必然性が高まると推察されるため、システム操作やネット環境に関するさらに入念な準備が求められよう。

表5 オンラインによる研修会の感想（100件）にみられた語彙の出現頻度

気分	初めて・不慣れ・緊張	22
	リラックス・ゆっくり(少人数で)	20
話の聞き取り 安さ	聞き取りにくかった	18
	聞き取りやすかった	13
対面による 研修会との比較	質疑に参加しやすい	8
	質疑に参加しづらい	7
利便性	勤務地	15
	COVID-19 対応	4
内容理解	理解しやすい	9
	理解しづらい	1
参加者間の 交流	同クラブ内支援員間で共有できた	9
	他クラブの話題共有ができた	4
	直接の交流がなく残念	9
システム環境・操作の不具合		9
資料		9
その他		2

【事後ヒアリング】

1回目のアンケートから支援員の困難感が高いと認められた児童クラブ6施設への訪問支援とZoomによる事後ヒアリングについては、図3に示すように、2回目のアンケートで、回答者全員から「役に立つ」という評価が得られた。

その理由について記述のあった5件を、表6に示している。事後ヒアリングでは「児童の様子を支援員間で振り返り、成長した面や今後の対応の仕方を確認しあうことができた」、「提案・助言するだけで終わらず、見届け確認、支援員の意欲付けまで行う支援であった」、「訪問支援後は、子どもたちがそれぞれに違う部分をよく見るようになったことにより、パニックになるのがなくなった」等が述べられていた。以上、個別の訪問支援については、いずれも高い評価が得られており、と

- かなり役に立つ
- 役に立つ
- 少し役に立つ
- 役に立たない

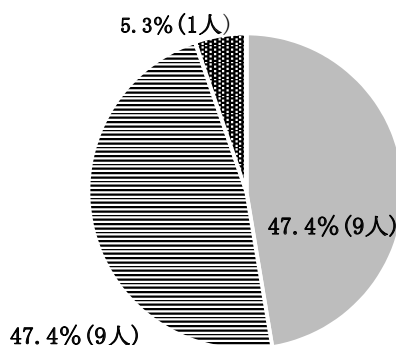


図3 事後ヒアリング役立ち度（回答者19人）

表6 事後ヒアリングに関する記述内容（5件）

事後ヒアリング (Zoom) について	振り返る機会をいただき改めて子どもたちそれぞれの成長を確認することができ、プラスになったことをうれしく思った。
	個別訪問の時に話されていたことを、実施して、その後よくなったところやよくなかったところのアドバイスをいただき、とてもよかった
	「私、今日やっと〇〇君の気持ちが分かった気がする」と支援の一人が zoom 会議後にもらした。納得の一言でした。会議後、皆清々しい表情で児童クラブに向かいました。提案・助言するだけで終わらず、見届け確認、支援員の意欲付けまでして支援して頂きました。
	事後ヒアリングの後、児童の様子を支援員間で振り返り、成長した面、今後の対応の仕方などを確認しあうことができた。
	今後の定期訪問を希望

りわけ支援員間での振り返りや確認の機会となっていることが認められる。

その一方で「可能であれば、定期訪問を希望する」という要望もみられた。これについては、先行研究でもその必要性が指摘されている。同様に2年間にわたって継

続的な巡回相談を実施した遠矢(2014)が、その試みを、入所時から加配が必要であった児童のクラブ内での集団適応を導く上で、「長期的視点でとらえた変化・成長に応じた支援プランの実施に不可欠であった」と述べていることも、継続的な訪問支援の必要性を明示する知見として興味深い。このように継続的に実施する巡回相談のあり方は、6年生までの在籍や支援員の配置も流動的な現状の運営体制からも、今後、より一層求められる放課後児童の健全育成のために重要な支援の1つとなるであろう。

4. まとめと課題

本研究の評価対象となった「訪問支援」・「オンライン研修会」・「事後ヒアリング」に関する記述には、多くの共通するキーワードがみられた。

研修会の満足理由のキーワードで最も頻度が高かった「対応・関わり方・支援」は、訪問支援においても複数の回答者に認められたものであり、いかに支援員が子どもとどのように関わればよいのか、日々、思いを巡らしていることが推察される。そのような中で本研究が取り組んだ支援は、いずれも支援員が自らの関わりを振り返り、前向きに取り組む意欲へと導くものであったと考えられる。

また「支援員間の共通理解」については、本研究の訪問支援で配慮が必要な子どもへの適切な対応について、主任支援員と単独で話し合っている際に、「専門家からのアドバイスとして、他の支援員にも理解してもらえ」と語っていたのが印象に残っている。すなわち、こうした訪問支援や研修会は、専門家から信頼性のあるアドバイスが得られる機会として期待されており、支援員間の共通理解を促進するのに役だつものと認められている。

「放課後児童クラブ運営指針」の「障害のある子どもの育成支援にあたっての留意点」では、「障害のある子どもの育成支援についての事例検討を行い、研修等を通じて、障害について理解する」とあり、「その中で気づきを共有することにより、子どもについての理解を深め、育成支援の内容の向上に生かす」ことが期待されており、こうした支援は、さらに継続し発展させることが望まれる。

また訪問支援では、「しっかりきいてもらえた」、「理解してもらえた」という記述がみられるように、支援員自身が受容されることで、心理的な安定感を得て、子どもに対応することが出来ると考えられる。クラブは、子どもにとって、放課後や長期休暇の長い時間を過ごす居場所である。重橋(2018)は『「気になる児童」が就学生生活を円滑に送るためには、学童保育を一つの『居場所』として機能させることが必要』と述べている。また田村(2016)は、「子どもの声から『信頼できる大人のいる子どものための居場所』の必要性を述べ、『子どもの居場所』は、子ども自身が『ありのままに居られる』『安心できる』『認

めることができる』といった子ども自身の主観的に感じる幸福感や福祉の視点が鍵になる」と述べている。その居場所の受け皿になる児童クラブで、支援員が子どもに寄り添うための心の余裕をもつためには、支援員自身が認められ、受容される体験もまた肝要であり、その貴重な機会としても、訪問による支援は、今後、さらなる発展が期待される取り組みと考えられる。

今後の課題

本研究の大枠となる主題の「放課後児童クラブにおける特別な配慮を要する児童の支援に関する研究」では、研究(I~III)の取り組みの他に、児童クラブに在籍する子どもの実態や支援員の聞き取りを踏まえて、求められる支援の手がかりを示すハンドブック「放課後児童クラブ支援員のための児童サポートブック ~特別な配慮を要する子どもの理解のために~」を作成し、糸島市の全クラブに配布した。それによりサポートブックは、個人で随時、手軽に見ることが可能になっている。しかしそうした個人使用のみならず、個別の配慮を要する子どもの事例検討の際にも、支援員の間で、その対応について、共通理解を得ながら支援方針を決定する際にも活用されることもねらいの1つに掲げている。そこでそのハンドブックが実際にどのように役立てられているかを検証することが今後の課題として残されている。それにより実際の利用者の視点を踏まえることで、支援員間の共通理解を促進し、より広く有効に活用されるためのサポートブックの改訂が可能になると期待される。

引用・参考文献

- 針塚 進 2018 小学校・学童保育・家庭の連携モデルの構築とスクールカウンセリングの臨床的研究
科学研究費助成事業 研究報告書
- 出雲市放課後児童クラブ課題等検討部会 2016 出雲市放課後児童クラブの今後の方向性について 平成28年度第2回出雲市子ども・子育て会議
<https://www.city.izumo.shimane.jp/www/contents/1472796181302/files/8.pdf> (2021. 6. 30)
- 重橋史朗 2018 「気になる児童」の行動特徴と支援に関する検討 - 学童保育における就学生活について - 中村学園大学発達支援センター研究紀要 第9号 59 - 66
- 厚生労働省 2021 改訂版 放課後児童クラブ運営指針解説書
- NPO 法人. 親子ふれあい教育研究所. さいたま市. 放課後児童支援員をサポートする相談システムの確立と、それに伴う事前調査及び心理相談 (モデル事業), 2016/08/19
<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/53142/04hureai.p>

df (2021. 6. 30)

- 大鶴泰輔 2021 放課後児童クラブ及び支援員の役割
放課後児童クラブ支援員のための児童サポートブ
ック ～特別な配慮を要する子どもの理解のため
に～ 6～8
- 田村光子 2016 子どもの居場所の機能の検討 植草
学園短期大学研究紀要 第17号 31～42
- 遠矢幸子 2014 学童保育における要支援児童に対する
支援 ―継続的な巡回相談を通じた事例― 香蘭女子
短期大学研究紀要 第56号 97～104
- 上村裕樹・坂本大輔・伊勢正明 2013 学童保育における
指導員の困難さに関する研究 ～学童保育所指導員を
対象とした質問紙調査の結果から～ 帯広大谷短期大
学紀要 第50号 59-67